

## 年報第三号を発行するに際して

昨秋初頭、所用で新宿行きの電車に乗車した際、ふと読み棄てのスポーツ紙のコラムが目に入りました。

「奈良の土の下から続々と古代史が発掘されている。敗戦までの『国史教育』の反動で古事記や日本書紀は、戦後の科学的史観でウソパチ扱いされてきたが、新しい物的証拠は神話にも史実を証明して、歴史の修正が続くそう。物的証拠が左右まとめてイデオロギイ史観を訂正するのは大歓迎云々」(傍点は引用者)

ここで言う「イデオロギイ史観」とは「敗戦までの『国史教育』」「皇国史観」と「戦後の科学的史観」「唯物史観や大塚史学を指していることは間違いないでしょう。天皇制批判の上に登場した戦後歴史学が掲げた「科学」が「新しい物的証拠」によって突き崩され、観念的なものとして皇国史観と等置されているのです。一スポーツ紙にこのように揶揄される所に現在の歴史学の状況が端的に示されていると思います。「科学」が観念論であったとする指摘に、すぐに思い当たるのは、歴史学研究会が掲げた「世界史の基本法則」――西ヨーロッパの歴史分析から導きだされた「法則」概念――です。中国革命や民族解放闘争に目を奪われた時期に生まれたこのテーゼが、今やNIEESの成功という現実の前に、根本的再検討が迫られています。

話は変わりますが、『川崎警察署文書』学習会の例会(昨年九月)の際、地域の近世的秩序の最終的な崩壊時期は何時かという討論がありました。そのなかで現在の大都市住民が置かれている状況についてひとつとさせられる発言が川崎市在住の市民会員からありました。「沖縄から出てきた者や東北からやってきたものなど、全国各地からの寄せ集められた住民は言語・習慣が全くことなり、到底一地域を主体的に構成する共同性など持ちようがないし、自前の地域

文化など生み出す術がない。そうした個々ばらばらになった市民に対して、行政や資本は一流文化人や施設をもって上から組織化している」と。従来の「掘りおこし」運動の理論では到底太刀打ち出来ない現実が支配的になっていることを痛感させられた次第です。

このような歴史学と地域の現実を前にして私たちの歩みは遅々たるものですが、一九八八年度京浜歴史科学研究会の活動の総括する『年報』第三号を発刊するはこびとなりました。

第一部には論文二点を収めました。新井論文は近世的秩序から近代的なそれへの転換点になる時期に焦点を合せた、永年地元川崎で足で稼いだ力作です。伊東論文は、ともすると自由民権運動に活躍した者は民権とのかかわりのみに焦点がかわされがち研究動向に対して、国権の発動である日清戦争と民権家とのかかわりを追求しました。

第二部は恒例となりました京浜歴史科研の春合宿「遠山茂樹編『近代天皇制の成立』を読む」の討論をふまえた報告を収録しました。

第三部は、私たちの一年間の学習活動一覧を掲げました。

当初は八八年度に「川崎警察署文書」の活字化を目論んでいましたが、それはかなわず八九年度以降の課題となりました。

京浜歴史研もいよいよ五年目に入ります。ともするとマンネリになりがちですが、歴史学と地域のとの今日的状況をふまえたより一層の充実した活動を目指したいと思っています。どうか忌憚のない批判と助言をお寄せいただければと願っている次第です。

一九八九年一月

京浜歴史科学研究会代表 内田 修道